SARANIP No.35

市立函館博物館館報 1996. 3 .31

市立函館博物館シンポジウム「縄文人の青函交流」報告

学芸係長　長谷部　一弘

●中野Ｂ遺跡

縄文時代早期後半（約8,000年前）の大集落跡で、早期の集落跡では、国内最大級。平成７年度現在500軒を超す住居跡、貯蔵用などの土壙250基、貝殻沈線文尖底土器を中心とする出土遺物380,000点を数える。

●石倉貝塚

縄文時代後期初頭（約4,000年前）の環状の盛土遺構、墓、貝塚、配石遺構等を有する青森文化圏の影響を受けた遺跡。平成６年度現在住居跡20軒、墓13基、土壙47基、擦消し縄文土器・骨角器等の出土遺物約160,000点を数える。

平成７年10月15日、函館ハーバービューホテルを会場に一般市民はじめ多数の道内外の考古学研究者等約200名を集め平成７年度博物館事業の一環としてシンポジウム「縄文人の青函交流」が盛大に開催されました。

今回のシンポジウムは、津軽海峡を挟んだ本州最北の地青森圏と北海道最南の地函館圏における縄文時代の経済・文化交流の軌跡とその意義を論じ、話し合ってもらうもので、近年考古学界において全国的に話題となっている「三内丸山遺跡」、「函館空港遺跡群」など具体的な発掘調査の成果を基に縄文時代の青函文化圏の研究成果と今後の課題について活発な討議がなされました。

シンポジウムは、今回のテーマの総論として青森大学教授村越潔氏による基調講演「縄文人の青函交流」がなされ、具体的な調査事例を基に「しょっぱい川」を挟む青函地域における活発な縄文交流が厳しい北の自然環境の中でたくましく存在していたことが述べられました。また、岡田康博氏（青森県教育庁文化課）、福田友之氏（青森県立郷土館）、小笠原正明氏（北海道大学）、田原良信氏（函館市教育委員会文化財課）、西本豊弘氏（国立歴史民俗博物館）によるパネルディスカッションでは、三内丸山遺跡の巨大集落・サイベ沢遺跡・函館空港遺跡群等の調査事例をまじえ、青函地域で出土している翡翠・黒曜石・琥珀・天然アスファルト・ベンケイ貝等々の比較化学分析による青函地域における活発な縄文交流の裏付け・証明と今後の検討課題として、青函文化圏における文化流通経路・自然環境への順応と具体的交流内容・相互の遺跡立地・分布状況等々が論議されました。

質疑討論終了後、(財)北海道埋蔵文化財センターおよび函館市教育委員会文化財課のご協力により、函館空港遺跡群「中野Ｂ遺跡」・「石倉貝塚」において現地説明見学会が行われ、目のあたりにする数々の遺構や出土遺物により一層シンポジウム「縄文人の青函交流」が意義深いものになったといえます。

シンポジウム開催にあたり、多くの関係諸氏のご協力により無事終了することができたことは言うまでもありませんが、何よりもまして函館博物館が大勢の市民参加と新たな考古学への熱い関心を得られたことは、今回のシンポジウムの最大の成果といえます。この貴重な成果を踏まえ、今後とも調査・研究や展示等々の幅広い博物館活動に有効に活かしてゆきたいと思います。

ペリー生誕２００周年「黒船が採集した箱館の植物標本里帰り展」報告

日本大学農獣医学部資料館学芸員　渋谷　千恵

今回の特別展示は、日本大学農獣医学部資料館で開催した「いま帰る　黒船が採集した日本の植物」(平成６年10月25日～11月26日)が最初のものです。このとき、当館の展示を見学いただいた函館市民の方々が、ぜひ函館でもという熱意によって市立函館博物館での展示が実現したものです。

この展示は今から約140年前に黒船が日本に来航したときに、日本の各地で採集した植物の標本展示で、アメリカ合衆国ニューヨーク植物園ハーバード大学より借用しました。

日本で植物採集をしたという事実や目的はあまり知られていませんが、1852～54年、1854～55年の２回にわたり、日本の各地で採集が行われております。これらの標本が日本で展示されるのは初めてのことです。また、植物標本を今回のような形態で展示することも非常に珍しいことです。

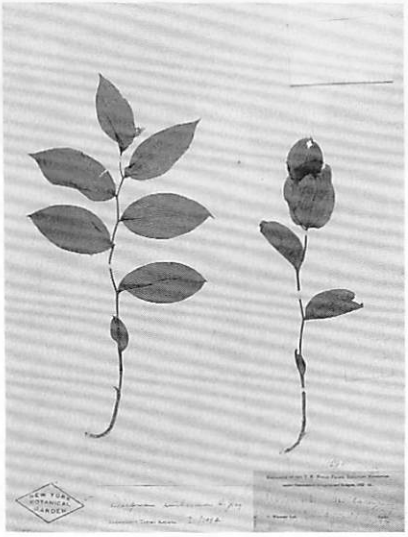
採集された植物は当時のハーバード大学教授Asa Gray博士によって研究・同定され、その結果約40種が新種として記載されたほか、日本と北米にはいくつかの極めて類似した植物が離れ離れに生育している（隔離分布）ことがわかりました。黒船採集の日本の植物がその研究に主要な研究材料を提供しました。

観覧風景

資料の内訳は種子植物標本76点、海藻標本30点(今回新たにつけ加えられた)、その他開港関係資料30件46点、植物関係資料８件10点、植物関係参考資料７件７点でした。

会期中（平成７年６月17日～25日）８日間の観覧者は約2,200人にもおよび、会期中にシンポジウム、植物観察会も実施されました。函館山では現在も当時の植物を見ることができ、黒船来航当時に想いを馳せた企画展となりました。

タイプ標本



チゴユリ

キンギンボク

戦後50年「戦争と平和資料展」報告

学芸員　尾崎　　渉

平成7(1995)年は戦後50年という節目の年でした。函館でも様々な行事が行われ、その一つとして戦後50年「戦争と平和資料展」を開催しました。この展示は函館市総務部総務課を中心に、同市史編さん室、市立函館図書館と当館の合同企画で進められ、当館で5月から市民の方々へ戦争に関する資料・情報の提供を呼び掛けたところ、約200件500点の資料提供をいただきました。これらを7月14日～28日の期間に函館市役所1階市民ホールで展示公開、戦争を体験した世代から小さいお子さんまで、多くの市民の方々に観覧いただきました。昭和20年7月14、15日の米海軍艦載機による空襲の記憶が風化されつつある現在、改めて戦争とは何かを考える良い機会となったのではないでしょうか。

展示された資料にかつての思いを馳せる観覧者（市役所1階市民ホール）

平成7年度特別展「箱館戦争の軌跡」報告

学芸員　保科　智治

今年度、五稜郭分館を会場に「箱館戦争の軌跡－戊辰戦争最後の戦い－」というテーマで特別展を開催しました。7月11日から9月24日の期間中、35,457人の方々に観覧していただきました。

「箱館戦争」は「五稜郭戦争」と表現される場合があるように、どちらかというと函館を戦地とした戦争と受けとめられる傾向があると思われます。そこで今回の特別展では道南一帯を戦火に巻き込んだ「箱館戦争」が、どのように展開していったのかを各地に残る資料をもとに展示してみました。展示内容では、「箱館戦争」というと個人の華々しい活躍が取り上げられがちですが、今回はそのような部分を省きあくまでも「戦争」であるという点に注目してみました。また、「箱館戦争」や展示資料に興味を持った人が、かつての戦地や資料の所蔵機関のおおまかな位置が分かるように、特別展で配布したリーフレットに地図を載せました。この展示をきっかけに道南各地に残る資料にも興味を持ってもらえれば幸いなのですが。

「箱館戦争」では戦火によって恐らく千人以上の市民が家を失ったりする被害を受けています。現在、「箱館戦争」は観光資源のひとつです。本来戦争は醜いもののはずですが、時間がそれを美化するのでしょうか。

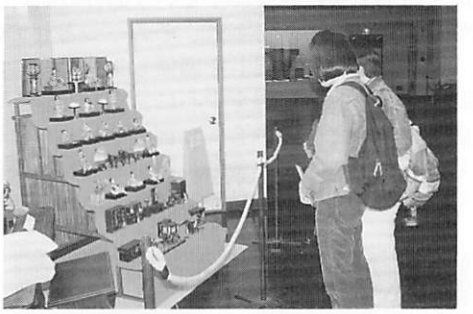
観覧風景

平成7年度企画展「新収蔵資料展」報告

学芸員　尾崎　　渉

前年度に市民の方々より寄贈いただいた資料、当館で購入した資料を年1回一堂に展示公開する「新収蔵資料展」を毎年開催していますが、今年度は9月19日～10月22日に開催しました。

平成6年度に寄贈・購入により新たに加わった資料は昭和9年函館大火関係資料や土器・石器等の考古資料、行李等の民俗資料、函館山でも見られる鳥類標本等231件767点で、1階第1展示室に展示しました。これだけの資料が分野を越えて展示されるのはこの展覧会だけで、博物館に収蔵されている資料を手早く知るうえではひじょうに良い機会ではないかと思いますがいかがでしょうか。



雛飾りに見入る観覧者

博物館実習を終えて

北海道教育大学教育学部函館校　平方　麻衣

学芸員というと、自分がいてその自分が相手にするものは「物」というイメージを持ってしまいがちだったが、この実習で対象は決して「物」だけではなく、あくまでも人間対人間の仕事なのだと感じた。また新たに知ることも多く、学芸員は仕事に就いてから本物の勉強が始まるのだと感じた。

この実習では、新収蔵資料の企画から展示までを中心に、実践的なことを数多く体験させていただいた。新収蔵資料といっても、動物標本から考古学資料、アイヌ関係資料から民俗資料にいたるまでその種類は様々で、これらを一つの空間に展示して良いものかとはじめは思った。それでも展示ケースごとに分類して並べてみると、なんとかなるものである。ただ分類ごとに展示の責任者が違うため、展示にはかなりのムラがあったと思う。最初の企画の段階で、展示の統一性をもっと相談すべきであったと反省している。展示に対してのこだわりも勿論必要だが、展示は決して自分のためにするのではなく、観覧者のことを思ってすべきだという気持ちでいなければ、単なる自己満足に終わってしまうだろう。

人間が生きていくうえで大事なことの一つに、感性を磨くということがあると私は思う。感性が豊かな人は、人間的にとても魅力的で深さのある人であり、博物館や美術館はそのための大きな助けになるはずだ。私自身もっと成長し、学芸員として多くの人の手助けができたらいいと思う。

新収蔵資料展の展示作業

平成7年度の実習生

調査と研究(1)　学芸係長　長谷部　一弘

第1回国際学術研究「在ペテルブルグ博物館アイヌ資料の民族学的研究」について

文部省科学研究費補助金による共同研究「在ペテルブルグ博物館アイヌ資料の民族学的研究」が、平成7年7月29日～9月3日の日程でロシア科学アカデミー・ペテルブルグ人類学・民族学博物館で行われ、当館から民族担当長谷部一弘が参加し協同調査および研究にあたりました。

今回の調査は、本学術研究プロジェクト（代表千葉大学荻原眞子教授以下6名）とロシア科学アカデミー・ペテルブルグ人類学・民族学博物館シベリア部門研究員(代表チュネル・タクサミ副館長以下7名）との共同調査体制により、推定1,300点を数えるロシア科学アカデミーペテルブルグ人類学・民族学博物館所蔵アイヌ民族資料の実態調査研究を目的とし、その内およそ1,100点を対象とした資料と基本台帳との照合確認、資料調査表の記録記載、写真・ビデオ記録の撮影等を行ないました。

今回の調査により、これまで世界的に未確認であった在ペテルブルグアイヌ民族資料の全容をほぼ掌握することができ、20世紀初頭のアイヌ民族学者ピウスツキーやシェロシェフスキー等が収集した樺太・北海道アイヌ関係資料が多数収納されている事実やこれまでアイヌ民族資料として未確認であった遊具、信仰・儀礼用具、服飾・装身具等々の生活用具の発見など多くの貴重なデータが得られました。特にこのようなアイヌ民族研究における画期的な発見の裏には，収集地・収集年代・資料内容・アイヌ語表記等の詳細な記録が記されている資料台帳が示すとおり、ロシア民族学先達の計画的なアイヌ資料収集目的の的確さと今日まで受け継がれてきた壮大なロシア民族学の伝統をかいまみることができました。

在ペテルブルグ博物館アイヌ資料の民族学的研究は、引き続き来年度も継続して調査が行われる予定であり、2か年にわたる調査データの集積と分析結果を基礎として函館博物館所蔵の日本を代表するアイヌ関係資料の意義とその位置付けも明確になっていくものといえます。

▲調査の様子
▶所蔵資料の一部

調査と研究(2)　学芸員　佐藤　理夫

渡島大島の鳥類生態調査に参加して

1995年5月16～27日にかけて、渡島大島において春の鳥類生息調査を実施しました。この調査は、渡島大島における漁港建設に伴う生態調査の一環で1990年から実施しているものです。今回の目的は、1993年の春と1994年の秋の調査において、この島が鳥類の渡りの重要な中継地となっていることが明らかになったことを踏まえ、春の鳥類の渡りが、期間内にどのように種類が変化し、どの鳥がいつこの島を中継地として北へ渡っていくかを調査することにありました。この調査には、私の他北海道大学水産学部の小城春雄教授、福島町立千軒中学校の林吉彦教諭、日本データーサービスの遠藤和雄研究員、他2名の計6名が参加しました。

過去の一連の調査のうち、1990～1991年に繁殖期における生息実態がほぼ把握できたことから、1992年以降、春期および秋期渡り鳥の実態をより正確に調査するため、鳥類標識調査を加えました。調査方法は、鳥類を主に網目が36㎜で長さ12mのカスミ網を使って捕獲し、「環境庁」と通し番号が刻印された1～15の各鳥の足のサイズに合った金属製の環を装着し、必要な外部計測を行った後放鳥するものです。

1992～1994年の調査では、日本初記録のコウライヒクイナ、日本では珍しいマミジロタヒバリ、シベリアイワツバメが記録されています。今回の調査では、51種684羽（内再捕獲は32羽）が記録されました。さらにそれ以外に30種が周辺で観察されました。種類について、初記録のものは含まれていませんが、記録羽数に比べ種数が多いのが特徴です。特記すべき種類は、サンカノゴイ、ヤマショウビン、マミジロタヒバリ、マミジロキビタキ、ムギマキ、シマノジコ、ノジコ、シマアオジです。詳しい調査内容については紙面の都合上今後に譲りたいと思いますが、この一連の調査結果を、当館の展示や教育普及等に徐々に生かしていきたいと思います。

職員の異動紹介

今年度の人事異動では館長以下４人も異動し、近年まれにみる大幅なものとなりました。新任の菅原館長に尋ねてみました。

－約１年近く過ぎましたが感想は？

これまでは外から見る立場でありましたから当初は異空間に紛れ込んだような感じでした。しかしわが館のスタッフに素人質問を繰り返し、博物館資料との対話を続けていくうちに、モノが語りかけてくるようになりました。知的好奇心を満たし、それを積極的に支援するのが当館の特徴のようです。

木村　繁　館長退職(3／31)
菅原　繁昭　市史編さん室主査→館長(4／7)
岡田　一彦　学芸係長→文学館長(4／18)
長谷部一弘　北方民族資料館長→学芸係長(4／18)
佐藤　太子　管理係→あおば学園(5／1)
湊　護　交通局→管理係(5／1)
佐々木芳子　南北海道教育センター→管理係(5／1)
野村　祐一　学芸係→北方民族資料館(5／1)
田村　一成　郷土資料館嘱託職員退職(3／31)
平塚　重之　郷土資料館嘱託職員採用(4／1)
窪田　里子　郷土資料館臨時職員採用(4／1)

平成７年度新収蔵資料紹介

平成７年12月31日までに寄贈いただいた資料のうち一部分を掲載しました。

○寄贈資料

・骨斧他　13件34点
　サハリン州郷土博物館（ユジノサハリンスク市）
・一刀流兵法目録　１件１点　田村　和子氏（札幌市）
・お櫃　１件１点　仲川　陽一氏（函館市）
・電蓄他　２件２点　能山　精祐氏（函館市）
・世界之東郷元帥　１件１点　井上　秀男氏（函館市）
・横一行書他　３件５点　星野　聰子氏（函館市）
・恐竜の卵化石　１件１点　山村　豊氏（函館市）
・軍服他　５件６点　庄子　昌氏（函館市）
・ミシン他　２件２点　鎌田　功太郎氏(函館市)
・やぐら炬燵他　２件２点　塚本　エミ子氏(函館市)
・行李他　３件３点　谷口　冨美子氏(函館市)
・旧イギリス領事館関係古文書　82件82点
・同写真資料　６件６点
　畑中　二郎氏（函館市）
・アカウミガメ（剥製）　１件１点
　阪井　秀雄氏（函館市）

○購入資料

・函館地方広告紙　84件89点
・奥州箱館図　１件１点

平成７年度博物館講座

単講座

No	講座名	開催期日	参加数
1	春の星座観測	５月12日(金)	３０
2	函館山自然観察会「春」	５月28日(日)	8
3	夏の星座と七夕	６月30日(金)	３１
4	特別展展示解説セミナー	７月23日(日)	１３
5	色を作って絵を描こう	７月23日(日)	１１
6	親子自然体験教室（キャンプ1泊2日）	７月26日(水)	２８
7	博物館資料に触れてみよう１	８月１日(火)	１８
8	道南の遺跡見学会(バスツアー)	８月２日(水)	３８
9	おし花を作ろう	８月６日(日)	２３
10	博物館資料に触れてみよう２	８月８日(火)	１４
11	鉄道の仕組みとＪＲ見学会	８月９日(水)	５５
12	道南の自然を探る(バスツアー)	９月３日(日)	４１
13	秋の星座と中秋の名月観測会	９月８日(金)	３０
14	冬の星座観測	12月８日(金)	２５
15	函館山自然観察会「冬」	２月４日(日)	6

ワークショップ（通年講座）

No	講座名	開催期日	参加数
1	函館の星空を探ろう	7年4月～8年3月	１７
2	函館の自然を探ろう	7年4月～8年3月	１３
3	箱館戦争の史跡を探る	7年4月～8年3月	8

－誌名ＳＡＲＡＮＩＰ（サラニップ）について－

アイヌ名：シナの樹皮で編んだ袋。
博物館情報や研究成果などをＳＡＲＡＮＩＰに入れておき、その蓄積が今後重要な資料となっていくようにと命名したものです。

SARANIP －サラニップ－No.35　1996.3.31発行
編集・発行　市立函館博物館
〒040 函館市青柳町17－１（函館公園内）
TEL 0138－23－5480
FAX 0138－23－0831